

令和 5 年 3 月 3 1 日

令和 4 年度 特別の教育課程の実施状況等について※

東京都		
カリキュラム開発拠点校	管理機関名	設置者の別
渋谷教育学園渋谷高等学校	学校法人渋谷教育学園	私立

※教育課程の特例を活用していないことから、令和 4 年度 WWL 構築支援事業の実施状況等を以下に記載

1. 特別の教育課程を編成・実施している学校及び自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

カリキュラム開発拠点校	自己評価結果の公表	学校関係者評価結果の公表
渋谷教育学園渋谷高等学校	N/A	N/A

※結果公表に関する情報について、ウェブ上で公開している場合は公開しているウェブページの URL を記入すること。ウェブ以外で公開している場合は、公開している情報を閲覧できる場所・方法等を適宜記入すること。

2. 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

テーマを SDGs (持続可能な開発目標) とし、中でも、平和、貧困、保健、ジェンダー、水問題、エネルギー、気候変動、イノベーションなど、高校生の生活に身近な課題を取り上げる。その特徴でもある参画型、統合性を活かした取り組みとする。教科連携型学習アプローチと探究学習活動を重視し、大学等の学問ネットワークを利用できる仕組みを整えることで、教科の枠に収まらない学びをカリキュラムの中に位置づける。それにより、社会課題に対する認識を深めると同時に、課題設定力や論理的思考力の強化を図る。

さらに自らネットワークを作りだし、活用する意欲とスキルを身につける。また、昨年開催した高校生の高校生のための国際会議「SOLA2021」(Shibuya Olympiad in Liberal Arts 2021) のネットワークを活用し、世界の高校生への発信を行う。それにより個々の対話力、英語力、探究力を高め、同じ理念を共有する高校と協働して空間を超えたチームワークを学ぶ。取り組みの見える化・ネットワーク化は、本校の S G H から続く研究成果の発信を容易にし、全国規模での SDGs 達成を担う次世代地球市民の育成を可能にする。

この取り組みのため、さらに探究型学習活動を教科、学校の枠を超えた連携のもと発展的な内容とし、高校生同士のネットワークを構築する目的のために次のような実施計画を策定する。

I、研究開発・実践

① Peace, Justice and Strong Institutions project (P&J プロジェクト)

平和な社会のあり方とその構築課題について、教科横断的な学びを通じて、近現代が

抱えるジレンマについての理解を深める。高校1年の1年間を通じて、公民・英語・国語が連携して、環境・人権・女性・産業構造・AI等の課題を取りあげ、内容理解を進め、英語による発信の機会を設ける。また関連した外部講師を授業に招き、日本語英語の2言語を使った学習を進める。多様な文化、価値観に触れるとともに、日本における課題を精査し、フィールドワークにつなげる。

さらに学んだ内容をもとに、人間の安全保障について考察する機会を設ける。テーマを持って多様な人々と交流し、事前学習を深める。また同じテーマをもとに、連携校と交流の機会を設け、互いに議論する機会を設ける。一人ひとりの意見を持った上で、チームで議論し、平和の構築に自分たちができることを発表する。渋谷校では校内選考を実施し、代表チームの生徒が、連携校であるフロリダの St. Stephen's Episcopal School の授業に参加し、オンラインも活用しながら、英語による互いの学びを深める経験をすすめる。

これらを通じて英語を活用した平和構築のためのカリキュラム開発と実践に取り組む。

また、より進んだ内容を学びたい生徒の要望に対して、連携大学での個別指導が受けられる機会を設ける。

② Partnerships for the goals project (P&F プロジェクト)

SDGs が策定された経緯を理解し、貧困、健康、ジェンダー、水問題、気候変動、イノベーション等をテーマとして、その要因について、教科の枠を超えて学ぶ。高校2年生で SDGs に関する課題を設定し、それをもとに企業や機関、団体と連携し、関連した社会貢献活動を自ら見つけて参加する。希望する生徒には、AL 委員会が、アドバイザーとなる大学教員・企業研究者と連携し、その活動を支援する。そこで得た学びをもとにレポートを作成し、発表する。社会活動としての SDGs に触れることで、世界とのつながりを意識し、自分たちの行動が SDGs 達成に影響しているという自覚を育み、主体的な活動への意欲を促す。

また、世界的な課題である環境問題に関する研修を海外の大学と連携して実施する。日本と異なる経済環境の中で、自国の経済的発展と環境保全を目指す工夫についてフィールドワークを通じて学び、SDGs が策定された要因や背景について理解し、共生社会の在り方について考え、協働実践に取り組む機会につなげる。

これらを通じて、カリキュラムに SDGs を取り入れた授業実践の開発に取り組む。

③ Research and Analysis project (R&A プロジェクト)

高校3年間にわたる長期な研究に取り組み、フィールドワーク、アンケート、実験を行い、論文を作成する。問いをたて、仮説を検証するスキルを身につけ、学問の本質を理解する。課題を設定するために、総合的な探究の時間を利用し、自分の考えを論理的に発表できる力を育むために、すべての生徒が参加したゼミ活動を実施し、活動の支援を行う。また、連携校と共有した学びとなるよう、中間発表などスケジュールを合わせ、共有教材をもとにした相互学習の機会を設ける。

また外部の研究者、卒業生、大学と連携し、校内でのライティングセンターを校内に

定期的に開設し、実験、分析の指導を受ける機会をつくる。ライティングセンターを継続的に実施できるよう協力者の人材バンクネットワークを卒業生と協力し構築する。さらに連携校とともに、年度末に連携校とともに、合同発表の機会を設け、互いに切磋琢磨する機会として、高校生が主催するポスターセッション大会を実施する。

④ 海外プロジェクトの充実と参加支援

英語を使う機会を意識的に増やすことで、4技能の習得に努め、海外の在住経験の有無によらず、参加しやすい機会を充実させる。また、単なる観光目的の交流ではなく、学びあいにつながる多様な交流プログラム開発と実践に取り組む。対面での交流にとどまらず、ICT を活用した交流にも取り組む。

a. 多様性に気づくプロジェクト

(オーストラリア研修を軸にした交流プロジェクト)

これまで交流してきた学校とプロジェクト参加をもとにした交流を行う。

互いの学校生活を理解することで、日本と異なる学校文化に触れる。移民やLGBTQ に先進的に取り組むオーストラリアの学校の現状を知ること、多様性を受け入れる土台を築ききっかけをつくる。毎年の相互交流を安定的に進めることで、学校間ネットワークを構築する。

(アジア研修を軸とした交流プロジェクト)

アジアの一員としての自覚を持つために、ベトナムの学校2校との交流を12月に実施する。1校は、日本語を学ぶ生徒との交流を通じて、日本がアジアに対してどのような支援を行ってきたか、また今後のアジア諸国との関係を考える機会とする。

またもう1校では、英語で交流する学校を入れることで、非英語圏での学習言語として英語の活用に気づく機会とする。オンラインで参加できるようなプロジェクトを進める。

b. 学習テーマをもったプロジェクト

(シンガポール研修を軸にした交流プロジェクト)

提携校であるシンガポール Raffles Institution との交流プロジェクトは、毎年学習テーマを決めて相互交流をはかる。参加する生徒の希望を活かした事前学習プログラムを作成し、現地のフィールドワークを取り入れた研修を実施する。テーマに沿った授業に参加し、交流をはかる。訪問と受け入れを連携継続して行うことで、より意識を持って取り組めるよう工夫する。目的・テーマを生徒自身がたてることも研修の柱として位置付ける。現地への訪問が難しい場合は、オンラインでの活動を行う。

(フロリダ研修を軸にした交流プロジェクト)

Peace, Justice and Strong Institutions Project のまとめとして交流を行う。交流では、現地の世界史の授業に参加し、プロジェクトの成果を発表する。また人種の多様性など社会的諸問題の理解と現地学生との交流を目的としてフィールドワークも行う。受け入れでは、歴史の授業参加や、東京フィールドワークを行い、相互理解を深める。訪問が難しい場合は、オンライン等を活用し、日本からの発信を行う。また、世界会議への参加意欲を互いに高め、若い世代のネットワークを構築する。相互訪問

が難しい場合は、オンラインを活用した交流活動を行う。

(高校生国際会議参加を軸としたプログラム)

2022年開催が予定されている国際会議(WIL)への参加を軸として探究活動を進める。社会課題に関する自国課題と探究し、その解決にむけた取り組みを行う。

c.自発的に取り組むプロジェクト

オンラインによる世界大会へ個人またはチームでの参加を支援する。校内のチームのみならず、連携校や他校の生徒も巻き込み、活動ができるよう協力体制を構築する。学校外でのプロジェクトの参加も進め、異なった環境でも取り組める生徒を支援する体制を整える。

d.その他

留学、海外進学への支援に取り組む。短期・長期の様々な学校外プロジェクトへの参加を支援する体制を整える。また、受け入れ留学生の支援を計画的に進める。特に日本語力の向上や授業参加だけでなく、母国について語る場を定期的の設け、校内での実施に取り組む。

⑤ SOLA2022 活動の取り組み

令和3年度の開催した SOLA2021 の取り組みを継続する。ネットワークを活かし、定期的に発信を行うことで、社会とのつながりを意識し、学びにつなげる機会とする。

(2) 学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

この取り組みで育みたい生徒像

これからの社会を担う若者は、課題を発見し、その解決への手法や行動を考え、実行する力が求められている。その活動は、国内に留まらず、多様な人々との協働が前提となっている。このような社会の要請に応えるため、日本の高校生の弱点ともいえる3点について、強化をはかることを目指す。

1点目は、正解を意識するあまり、長期的な探究に取り組む姿勢を育てられていないこと、2点目は、学習が個人的なものとしてとらえられ、チームでの学びの良さが教育現場で十分に活かされていないこと、3点目は、高校生が主体となる諸外国との交流プロジェクトが不足していることである。これらに対して、この事業では、国内外の連携校との交流の機会を通じて、国際理解教育やコミュニケーション力の育成をはかるとともに、より高度な発信力や主体性が求められる体験を取り入れ、自ら課題を発見し、行動する人材の育成を目指す。また、大学、企業、国際機関、地域団体等と協働し、高校生が主体となる学びのコンソーシアムに積極的に関わる人材を育むことを目指す。

(3) 特例の適用開始日

令和4年4月1日

(4) 取組の期間

令和5年3月31日まで

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

カリキュラム委員会によるプロジェクトの評価・検証を実施し、都度改善をはかる。

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- ・ 計画通り実施できている
- ・ 一部、計画通り実施できていない
- ・ ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

※(1)で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- ・ 実施している
- ・ 実施していない

<特記事項>

添付資料（かいず SOLA 特別号）を全校保護者と関係機関に送付し、また、抜粋内容を本校 HP にて公開した。

<https://www.shibushibu.jp/about/efforts.html> （2022 版は今後掲載予定）

<https://sola2022.com/> かいず SOLA 特集号

4. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

本校の教育目標「自調自考」、「国際人の資質を養う」、「高い倫理感を育む」は、いずれもこの取り組みの育みたい生徒像に反映されている。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

社会課題に目を向け、それぞれの個性を活かした取り組みを通じて、豊かな人間性を養うとともに、将来に向けての意欲を高め、国際社会の一員としての自覚を促すことを目指しており、高等学校における教育の目標に準拠したものとなっている。

5. 課題の改善のための取組の方向性

毎年、生徒・教員対象に校内アンケートと WWL アンケートの両方を行い、生徒の取り組み状況、満足度、課題について確認し、次年度計画に反映している。